

2020年7月26日（日）  
聖霊降臨後第8主日 銀座教会 主日家庭礼拝

礼拝招詞 「希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた  
聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」 ローマ5：5

主の祈り

使徒信条 我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。我はその独り子、我らの主、  
イエス・キリストを信ず。主は聖霊によりてやどり、  
処女(おとめ)マリヤより生れ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、  
十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、  
三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、  
全能の父なる神の右に座したまえり、かしこより来たりて、  
生ける者と死ねる者とを審きたまわん。  
我は聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪の赦し、  
身体のよみがえり、永遠の生命を信ず。 アーメン。

讃美歌 520 しずけきかわの

聖書 使徒言行録18章24～28節

18:24 さて、アレクサンドリア生まれのユダヤ人で、聖書に詳しいアポロという雄弁家が、エフェソに  
来た。18:25 彼は主の道を受け入れており、イエスのことについて熱心に語り、正確に教えていた  
が、ヨハネの洗礼しか知らなかった。18:26 このアポロが会堂で大胆に教え始めた。これを聞いたブ  
リスキラとアキラは、彼を招いて、もっと正確に神の道を説明した。18:27 それから、アポロがアカ  
イア州に渡ることを望んでいたため、兄弟たちはアポロを励まし、かの地の弟子たちに彼を歓迎して  
くれるようにと手紙を書いた。アポロはそこへ着くと、既に恵みによって信じていた人々を大いに助  
けた。18:28 彼が聖書に基づいて、メシアはイエスであると公然と立証し、激しい語調でユダヤ人た  
ちを説き伏せたからである。

牧会祈祷 天の父なる神さま。新しい主日の朝をお与えくださりありがとうございます。世界も私たちも困  
難な中に置かれています。私たちの恐れをご存知の主が、この嵐のときを冷静に平安のうちに、また愛を持  
って過ごせますようお守りください。祈りの帆を張って、主に望みを抱きつつ進めますように。愛する家  
族、兄弟姉妹の一人おひとりを、主がお支えくださり、祝福してください。医療従事者、政策立案者のた  
め執り成しの祈りをささげます。病の中にある方、被災されている方々を主がみづばの陰に隠してくださ  
い。また全ての人のために、感謝と願いとをささげます。主を見上げ、互いに愛しあって過ごせる一週間と  
なりますようお導きください。この祈り、主イエス・キリストの御名を通してお祈りいたします。アーメン

本日の聖書箇所はエフェソの舞台は、エフェソです。エフェソは、1世紀前後のキリスト教伝道の中心地と言われます。パウロの弟子が記した可能性があると言われる「エフェソの信徒への手紙」だけではなく、「ヨハネの黙示録」における教会への七つの手紙の宛先の筆頭がエフェソの教会です（ヨハネの黙示録2：1～7）。「テモテへの手紙」はパウロからテモテにエフェソにとどまって教えるよう励まします。コリントの手紙もエフェソで書かれたとされます。ですから、エフェソの教会については聖書の証言が多方面から扱っており、知り得ます。そこで、教会の成長・学び・交わりについて私たちは多くをエフェソの教会関係の聖書箇所からお聞きすることができます。

アポロは、学術都市であるアレクサンドリアで生まれ育ち、聖書（旧約聖書）に詳しく、雄弁の賜物を与えられている人（18：24）でした。本日の箇所は、彼がエフェソに来た時・パウロがエフェソに来る前の話です。アポロは、主の道を受け入れ、主イエスについて正確に熱心に解き明かしていたが、ヨハネの洗礼しか知りませんでした（18：25）。ヨハネの洗礼は水による洗礼であり、悔い改めの洗礼です。アポロは、主イエスの名による洗礼を知り、聖霊の賜物を受ける洗礼を宣べ伝えることをプリスキラとアキラから学びます。

本日は「教え」に注目します。教理教育を伝統的にカテキズムと呼びます。カテキズムの元となったカテーケオー（教える、知らせる）という言葉は、本日の18章25節に出てきます。「18:25 彼（アポロ）は主の道を受け入れており」とあり、新改訳聖書ですと「この人は主の道について教えを受け」とあります。ペンテコステの時から初代教会は、2：42「使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ること」に熱心であったと記されます。福音が伝わり、キリスト者が増えていく中で、それぞれのキリスト者の成長に「教え」というまでもなく重要なことでした。聖霊による主イエスについて、教会についての教えがあります。

アポロは、それまでに受けた「教え」の影響なのでしょう、「イエスについて正確に教えていた」けれども「ヨハネの洗礼しか知らなかった」とあります。つまり、教会にとって欠かせない主イエスの名による洗礼を知りませんでした。ヨハネの悔い改めの水の洗礼は、「主の道を整える」（ルカ福音書3：4）のものでした。主イエスの十字架と復活により私達に送られた最大の賜物は聖霊です。霊と水による洗い、主イエスの名による洗礼が必要でした。アポロは、この点でまだキリスト教教会の伝統を知らなかったと考えられます。

19章でパウロがエフェソに到着した時、そこにいた弟子たちは、ヨハネの洗礼しか知らず、聖霊のことも知りませんでした。そこで、パウロが主イエスの名による洗礼を教え、また聖霊の賜物が弟子たちに与えられます。彼らはアポロの教えを受けていたかもしれません。

このアポロに「より正確な」神の道を教えたのがアキラとプリスキラでした。夫婦は、パウロと同じテント職人で、コリントでパウロを迎え入れ一緒に暮らしました。パウロはこの夫婦を伴ってエフェソ伝道に行きます。夫婦は、パウロから多くの主イエス・キリストについての教会についての教えを受けて知っていました。アポロは主イエスについて「正確に」（18：25）知っていたけれども、「より正確な」（18：26）神の道についての教えが必要でした。このアポロが会堂で大胆に語っていたので、プリスキラとアキラは「彼を招いて」もっと正確に教えました。この「彼を招いて」という言葉は複数の意味があります。「受け入れる、家に招く、わきに連れて来る」です。この

夫妻は、会堂という「公的」な場所から、アポロをわきに呼び「私的な」場所に受け入れ、迎え、教えました。アポロを受け入れつつ、家に招いて、「より正確に」神の道について教えたのです。ここで、本日の箇所では、「プリスキラとアキラ」という風にプリスキラの名前が先に記されます。これは、おそらく家庭においては夫人がより迎え入れるものとして主たる役割を担うことからでしょうか。あるいは、プリスキラは奉仕や教えることについて賜物を受けた存在だと初期キリスト教会の時代の資料でも記録されています。いずれにせよ、プリスキラとアキラ夫婦は、アポロを快く迎え入れ、期待を込め、神の道をより正確に教えました。アポロがしるべき教会の伝統を伝えたのです。聖霊によって促されました。ここで、アポロの伝道者としての決定的な前進が記されます。公に語る教師とされたアポロですが、彼はパウロと交わりを持ったこの夫婦から、主イエスのお名前による洗礼について知る必要がありました。ここに描かれているのは、信者の間の教えの交わりといってもいいと思います。熟練した信仰の立場にある存在が、「より正確な」教会の教え・信仰を伝えていく教えの交わりの姿です。それはしばしば、家庭における親しい交わりにおける教えであったのです。現在の私達のようなステイホームの状況ですと、電話や手紙、オンラインの交わりであってもいいと思います。アポロのように主の道への信仰はあっても、知らなければならぬ重要なことを知らない人に、より正確に知り、聖霊に導かれている存在が教えるという大切な教会の交わりです。

教えというと様々な側面があります。「理性」による教えというと、信仰はもっと人間の存在全体のもの、全人格的なものではないかという問いがあるかもしれません。実際、例えばドイツで宗教改革の時代の次の世代に、教理が整ったが、理性ばかりで、信心の熱心さや敬虔さに欠けるのではとして「敬虔主義」が起きました。しかし、「コリントの信徒への手紙一」でパウロは言いました。「霊で祈り」「理性でも祈ることにしましょう」（14：15）、「霊で賛美し、理性でも」賛美しよう。教理的理解を深め、理性でも、霊性においても、祈り、賛美し、信仰生活を送ろう。

アポロは、この後コリントで牧会します（使徒言行録19：1）。コリントの信徒への手紙に、「私が植え、アポロが水を注いだ」（コリント一3：6）とあるように、コリントでパウロが建てた教会をアポロは受け継いで牧会し、水を注いで教会を霊において豊かに養いました。この手紙でも「パウロ派」「ケファ派」「アポロ派」という内部の信仰の分派が起きかけていることを、パウロは福音による一致を解いて戒めました。これは、パウロやケファやアポロが対立していたのではありません。パウロはわたしたちは「神のために力を合わせて働くもの（コリント一3：9）」とっております。しかし、ここからアポロが、教会で大きく仕えるものとして用いられたということがわかります。エフェソでプリスキラとアキラに教えを受けたことで、アポロは主の道に豊かにお仕えできるようになりました。

こうしてアポロが正しい教えに導かれる姿は、まさに聖霊によって主の道がまっすぐに整えられていく出来事に思えます。曲がっていたものはまっすぐになる、そのような聖霊の力による、主の道が整えられていくという教会教育の姿がお聞きできます。

キリストの十字架と復活によって与えられる最大の賜物は聖霊であると申しました。アポロは「雄弁」でしたが、聖霊は一人一人に役割と賜物を与えます。パウロが「わたしたちは神のために力を合わせて働くもの」といったように、たった一人では教会は導かれないのです。教会は世代交代をしますし、また長く教会にいる人もいれば教会に来たばかりの人もいます。

コリントの信徒への手紙でも、パウロは、神様が教会に「使徒、預言者、教師、奇跡を行うもの、病気を癒す賜物を持つもの、援助するもの、管理するもの、異言を語るもの」を部分としてお立てになったと言います。一人一人に与えられている賜物を持って、聖霊によって委ねられているものを守り、教会にお仕えします。その中でも、どのような役割が与えていようとも、最高の道は愛の道であるとパウロは愛の賛歌を続けるのです（コリントの手紙一13章）。

「<sup>4</sup> 愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。<sup>5</sup> 礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。<sup>6</sup> 不義を喜ばず、真実を喜ぶ。<sup>7</sup> すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。<sup>8</sup> 愛は決して滅びない」

私たちは、プリスキラとアキラとがした教えにも、アポロが主の道を受け入れ宣べたえことにも、パウロの伝道にも、この愛をお聞きすることができると思います。私たちも、今与えられているすべきことの中で、愛を持って主の道、教会にお仕えしたいと思います。また、誰かが知るべき教会の教えを必要としていて自分がその賜物を与えられていたら、喜んで教えたいと思います。分かち合いたいと思います。聖霊がそれをなさせてくださいます。

祈り 天の父なる神さま、聖霊降臨後第8主日の礼拝の恵みに感謝いたします。私たちに与えられた困難さと不安と恐れが続いています。どうか、神様が一人一人とともにいて、愛で満たしてください。不安や孤独にある方に慰めと勇気をお与えください。神様が教会をお立てになるのに、私たち一人一人に教える教師を、先達をお与えくださり、交わりをいただいて来たことに感謝します。私たちが受けたものを用いて、必要としている隣人に教会のことを伝えることができますように。聖霊を豊かにお送りください。イエスは主であると多くの舌が賛美できますように。聖霊に満たされて、この一週間も主とともに平安のうちに歩ませてください。主イエス・キリストの御名によって祈ります。 アーメン

祈 禱（各自、自由にお祈りください）

祈禱課題 聖霊が世界の諸教会に注がれますように  
病の中にある方、困難な状況にある方々を覚えて  
医療従事者を覚えて  
被災地・被災地にある教会を覚えて

讚美歌 285 主よ みてもて

献 金

頌 栄 544

祝 禱 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。

アーメン